

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

〈日本語訳：総括〉

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2020-03-30 キーワード: 作成者: 張, 維安 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009556

〈日本語訳：総括〉

みなさん、こんにちは。この度、渡邊先生の講演を聞きたいへん収穫が大きく、また皆さんの発表を聞き、多くの情報を刺激を得ることができました。このシンポジウムの終わりに皆さんに私の考えをお伝えし、客家研究やエスニシティ研究にいくつかの反省をおこなっていきたいと思います。

国家と族群政策

この2日間、多くの発表者が客家のアイデンティティについて広く議論しましたが、国家が果たしてきた役割についてはほぼ等閑視されていました。実際のころ、国家によるエスニック集団（族群）の形成は非常に重要です。台湾を例にしますと、清朝期、政府による客家の分類は、多くの人々のアイデンティティに影響を及ぼしてきました。この時代の客家が漢人、粵人、義民または客戸であり、エスニック集団であるといえませんでした。当時の政府官僚による人々の分類は、しばしば生命財産やその他の権益、例えば土地所有権、科挙の資格や定員数に影響をしてきました。日本政府が台湾にあった時、客家は戸籍調査により「喀家族」「粵族」「広東人」などと区分されました。後に国民党政府が、彼らを客家と再び分類・命名したのです。

国家が人々を分類する時、エスニック集団の境界はますます明確になるのでしょうか、それともぼやけてくるのでしょうか。戸籍調査や人口調査による分類は、しばしば似通った効果をもたらします。台湾を例とすると、政府が身分証の貫籍の欄を取り消すまで、政府の登記欄の裏側には客家の分類、もしくは他の手がかりが明確に記載されていました。こうした国家と客家分類の間の関係は、台湾だけでなく、インドネシア、ベトナム、マレーシアや他の海外の地域でもみられます。国家権力によるエスニック集団形成の議題をここにみつけることができるのです。

もちろん、政府の政策には人間集団を分類する他、時としてエスニック集団と関係する政策があります。例えば、言語政策はエスニック集団にとって非常に重要です。台湾を例としますと、昔は「華語」（中国語）のみを重んじていましたが、今では多元文化を強調しています。昔は「方言」が禁止されていましたが、現在は客家語を話すことが奨励されており、客家語のスピーチ・コンテストなど関連するイベントが催されています。

エスニック集団政策の規範には、国家のエスニック集団に対する見解、さらには国家の社会文化統治に対する枠組みが隠されています。早期のアメリカが「民族のるつぼ」の政策に転換したように、1つの整った文化体系に向かったり、自然生態を維持するようにしたり、さらにはその多様性を推し進めたりすることには、みな支配者が国家に対して抱くエスニック集団政策の理念とかがかわっています。1つの社会のエスニック文化の発展は国家の統治理念が強いかかわっています。エスニック集団の研究には、それが

置かれる国家のエスニック政策の研究が求められます。

客家と周りの他者

第二に、一部を除きあまり議論がなされなかったテーマは「他者」です。客家の周りにいる他者のことです。「他者」は、客家の形成やその他のエスニック集団の議論に重要なものです。客家研究は、客家と他者の相互関係に注視しなければなりません。それが衝突や協力であろうと、文化や経済の問題であろうと、です。さらには、客家は独立した存在ではなく、他のエスニック集団との関係のなかで存在しているともいえます。すなわち、客家は他者との相互関係のなかで構築されるものであり、異なる時間・空間には異なる他者がいて、異なる特色をもつ客家をつくりだすのです。特に海外の客家華人とその周りにいる他者は、おそらく他の「方言」を話す華人であったり、現地の原住民族であったりします。多くの客家文化はみな自己と周辺の他者との相互関係の産物となります。厳密に言うならば、他者との関係を認識することは、客家文化を認識する一つのやり方となります。

エスニシティ論がないと容易に迷い込む

この2日間、我々はいかに客家が形成されるか、いかにある人が客家とみなされるのかについての、多くの議論をしてきました。しかし、エスニック・アイデンティティやエスニック集団認定に関する理論はあまり議論されませんでした。いかに客家となるのか。客家語や族譜の客家血脈に基づくのはプラグマティックではありますが、多くの理論的な問題を抱えています。例えば、ベトナムのガイ族は客家であるのか。ベトナムの客族は我々が言うところの客家であるのか。客家の境界はずっと曖昧であり、可変的です。しかも臨機応変に変わりうります。個人が気軽に参入したり、気軽に離脱したりしますので、感覚的に自由ではあるのですが、その境界を定めることは容易ではありません。先ほどの話にもありましたように、ある人は客家語を話すのに客家ではなく、客家語を話さないし本人も客家であると認めていないのに、学者がその人を客家として分類することもあるのです。あるところでは、学者が調査に入る前には本地人であったにもかかわらず、学者が調査した後には客家となっています。また、江西省から雲南省に移住した客家は、雲南に移住した時に客家としてのアイデンティティをもっていませんでした〔*本シンポジウムの別のパネル（本書未掲載）で飯島典子氏が発表していた内容に基づく—訳者注〕。もしかしたらいくつかの地域では、19世紀の時のように、今の「客家は形成されている途中」であるのかもしれませんが。客家語を話す地域があっても、「どの言葉を話す人が客家であるのか」という情報が得られていないため、本地人を自称しており、ある時に彼らが客家であると呼ばれる（または自称する）、という現象が今日でも発生しているのです。理論がないと、客家を議論する時の基礎が容易に失われてしま

うのです。

他には、同じ集団なのに名称が異なるというパターンがあります。周知の通り、広東・福建・江西の交界区の人々はもともと客家をは名乗っておらず、潮州・汕頭、浙江、広府人居住地の方へ行ってから、それぞれ客人、客家、棚民と異なって呼ばれるようになりました。ベトナムでは「ガイ族（艾族）」になり、広西では「来族」と呼ばれています。（生物上）同じ集団に属する人々が異なる名称をもつということは、誰が誰を客家と決めつけているのでしょうか。客家はやはり歴史の偶然であるのでしょうか。

客家として生きる、客家として生活する？

「客家には選択してなることができるのでしょうか」。例えば、台湾で私は客家語を話し、客家地域に住み、客家料理を食べています。客家であることはごく自然であり、私とあらゆるものが客家という共同体に属しているかのようです。しかし、私は客家をやめることができるのでしょうか。時としてそれは困難でしょう。客家というカテゴリーに自由に入出入りすることはできないのではないのでしょうか。人は生まれながらにして身分が決まっており、エスニック集団がそうで、自分で選択することはできません。

しかし、人類学者が押し出している別の概念によると、エスニック集団は生まれながらにして決まっているわけではなく、自己の生活様式によって決定できます。この議論からすると、人びとはいかに生活するかで、誰が客家であるか判断されます。例えば、私が魚の捕まえ方を修得し、海側に住み、魚を捉えていれば、私は漁夫になります。先ほどの渡邊教授の言い方を用いますと、私は客家としての生活習慣をもっており、客家語を話し、客家地域で暮らしているから、客家であるということになります。私はすでに客家であるのは、生活を通しているから客家となっているのだというのです。同様に、もし私が牛の使い方を知り、稲をまき、農夫としての生活をすれば、私は農夫と呼ばれるでしょう。私は、どのように生活するかで、彼がどうなるのかという見解には賛成です。だから、もし私が客家語を話さなくなり、客家としての生活を営まなくなれば、私は客家ではなくなります。ただ、あなたはそれでいいと思うのでしょうか。エスニック集団は、このように自由に加入・離脱ができるものなのでしょうか。

世界各地の客家の特質については比較研究が必要である

本シンポジウムでは、世界各地の客家の特色について多くを語っています。今回は、これまで私が参加した学術シンポジウムのなかでも最も系統的、かつ最も多くの国・地域が含まれたシンポジウムです。世界各地の客家の特質については、第一にグローバルな規模で離散していること、第二に国を超えてつながっていること、第三に異なる要素がアイデンティティとなっていること、が挙げられます。（国／地域を超えてつながる）客家団体のイベントが最近では毎年をおこなわれ、年々熱がこもっているように、各地に

離散した客家がグローバルなレベルで非常に効果的につながるようになっているのです。しかしながら、これが客家の特徴であるかについては、他の集団、例えば潮州人などとも比較しなければならないし、先ほど渡邊先生が話したように沖縄の人々もそうなのか比較してみなければなりません。昔、客家研究者は世界のいたるところに客家がいると語ってきましたが、他のエスニック集団もそうなのか、いま客家研究にはこうした比較研究の基礎が欠けています。

つながりに関していえば、世界各地の客家は毎年懇親大会をおこなっています。また別の各種の联谊会、商会やそれと関係するつながりも特に多いです。こうして分散してはつながることが客家の特徴といえるのでしょうか。客家の特徴は非常に多様であり、差も激しいです。互いの言語は通じないことがあり、習慣も異なっており、時として信仰も異なっています。ところが、それにもかかわらず客家は「客家」としての強いアイデンティティをもっています。異なる地に離散しても強い客家アイデンティティをもつのは、どうしてなのでしょう。そのなかには客家としての要素が内在しているともいうのでしょうか。

結論

最後にこの場を借りて、国立民族学博物館にこのような貴重な場を与えていただいたこと、特に河合洋尚さんに企画いただいたことを感謝します。ここ数日、我々は非常に良い学术交流をすることができ、こうした機会が今後も続いていくことを望んでいます。来年は台湾の交通大学で次の国際シンポジウムを開催いたします。その時また皆様とお会いしましょう。ありがとうございました。